

寺田さんに最後に逢った時

和辻哲郎

青空文庫

去年の八月の末、谷川君に引つ張り出されて北軽井沢を訪れた。ちようどその日は雨になって、軽井沢駅に降りた時などは土砂降りであつた。その中を電車の終点まで歩き、さらに玩具のように小さい電車の中で窓を閉め切つて発車を待っていた時の気持ちは、はなはだわびしいものであつた。少し癩癩が起きそうになるまで待たされたあとで、やっと動き出したかと思うと、やがてまたすぐ止まつた。旧軽井沢であつたらしい。ここでもなかなか発車しそうにない。うんざりしながら鄙ひなびた小さな停車場をながめてみると、突然陽気な人声が聞こえて四、五人の男女が電車へ飛び込んで来た。よほど馳かけて来たらしく息を切らしている人もある。

ふと見るとその一人が寺田先生であつた。

自分にはこの時一種の驚きが感じられた。この雨の中のわびしい電車に乗るなどということは、よほど特殊な事情によるのである。自分は谷川君との約束を幾度か延ばし延ばししていた罰でこんな羽目になった。しかし軽井沢に避暑している人たちがまさかこんな日に歩くとは思わなかつた。まして寺田さんの一行が自分と同じく北軽井沢までも行かれるとは全然思いがけなかつた。ところが聞いてみると寺田さんの方でも松根氏との約束を延ばし延ばししている内についてこんな日に出掛けることになったのだそうである。しかもその朝東京から出掛けて来た自分たちと軽井沢にとうりゆう逗留してられる寺田さんたちが、こうして同じ電車に

落ち合ったのである。

が、寺田さんと話しているうちにこのような偶然よりも一層強く自分を驚かせるものがあつた。何か植物のことをたずねた時に、寺田さんは袖珍^{しゅうちん}の植物図鑑をポケットから取り出したのである。山を歩くといろんな植物が眼につく、それでこういうものを持つて歩いている、というのである。この成熟した物理学者は、ちように初めて自然界の現象に眼が開けて来た少年のように新鮮な興味で自然をながめている。植物にいろんな種類、いろんな形のあることが、実に不思議でたまらないといった調子である。その話を聞いていると自分の方へもひしひしとその興味が伝わってくる。人間の作る機械よりもはるかに精巧な機構を持った植物が、

しかも実に豊富な変様をもつて眼の前に展開されている。自分たちが今いるのはわびしい小さな電車の中ではなくして、実ににぎやかな、驚くべき見世物の充満した、アリスの鏡の国よりももっと不思議な世界である。我々は驚異の海のただ中に浮かんでいる。山川草木はことごとく浄光を発して光り輝く。そういったような気持ちで寺田さんは我々に伝えてくれるのである。こうしてあの小さい電車のなかの一時間は自分には実に楽しいものになった。

あの日は寺田さんは非常に元気であつた。電車へ飛び込んで来られる時などはまるで青年のようであつた。自分などよりもよほど若々しさがあると思つた。その後一月たたない内に死の床に就つかれる人だなどとはどうしても見えなかつた。これから後にも時

々ああいう楽しい時を持つことができると思うと、寺田さんの存在そのものが自分には非常に楽しいものに思われた。それが最後になったのである。

青空文庫情報

底本：「和辻哲郎随筆集」岩波文庫、岩波書店

1995（平成7）年9月18日第1刷発行

2006（平成18）年11月22日第6刷発行

初出：「渋柿」

1936（昭和11）年2月号

※編集部による補足は省略しました。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2012年1月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

寺田さんに最後に逢った時

和辻哲郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>